

【溶接ニュース 11 月 16 日号非破壊検査特集】に記事が掲載されました。

《インタビュー》

日本非破壊検査協会 関西支部長

横野 泰和 氏

検査対象物の『かかりつけ医』に



以下、掲載文

コロナ禍、支部活動も約1年半の間自粛を余儀なくされたが、7月20日ようやくオンラインではあるが幹事会を開催することができた。当支部では幹事会をはじめ、研究発表会や技術サロン、イブニングサロン、見学会、UTまかせとき大会など、支部独自の様々なイベントを開催している。2019年度(20年3月まで)は全て実施できたものの、感染が拡大した4月の緊急事態宣言以降、会員の健康と安全を最優先に全ての行事を取り止めた。21年度前半も同様の状況が続いたが、ようやく宣言解除となり活動再開への期待が高まっている。

技術サロンの講演者や工場見学会の受入先などは、すでに自粛前に企画をまとめ、候補企業に打診するなど準備が整っていることから、今後の状況を見極めながら実現していきたいと考えている。同時に今回の経験を踏まえ、ニューノーマル時代に対応したリアルとリモートのハイブリッド型を併用し、より多くの方々が参加できる勉強会や発表会を指向していきたい。また実技を伴うUTまかせとき大会なども工夫していきたい。

一方、業界全体の課題としては、UT(超音波探傷試験)やRT(放射線透過試験)、PT(浸透探傷試験)など従来検査法の更なるレベルアップに加え、如何に新しい工法・技術を取り入れていくか、が重要だと考えている。各種モニタリング技術やドローン、AI活用などにより検査技術の高度化や適用範囲拡大につなげていく必要がある。

同時に、最終的にはこれら技術を操作・活用し判断するのは人であり、これまで以上に検査員一人ひとりの技能、知識の向上が求められる。我々、非破壊検査業界は、鋼構造物や各種プラントの『かかりつけ医』というプライドを持ち、必要とされる技術、技量を備えた人材を育てなければならない。当支部では様々な活動を通じ、これからも業界発展に貢献していきたい。